

「支えにされた琉球」補遺

著者	小林 ふみ子
出版者	法政大学国際日本学研究所
雑誌名	国際日本学
巻	14
ページ	59-63
発行年	2017-01-31
URL	http://doi.org/10.15002/00021283

「支えにされた琉球」補遺

小 林 ふみ子

法政大学国際日本学研究所を拠点とする「国際日本学の方法による〈日本意識〉の再検討」プロジェクト（文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業、平成二十二～二十六年）アプローチ1「日本意識の変遷」の総まとめとして、プロジェクトメンバーが寄稿して田中優子編『日本人は日本をどうみてきたか—江戸から見る自意識の変遷』を刊行した（笠間書院、二〇一五年）。筆者はそれに三編を載せ、そのうち「支えにされた琉球」と題する論考で、近世日本において、琉球を「日本を敬愛してその風俗習慣に倣う国」と位置づける言説が広く流通していたことを論じた。同稿末尾で、そのような勝手な想像ないし願望を象徴する話として、つぎのような内容の伝聞を紹介した。天保三年の琉球使節来聘を当て込んで刊行された一連の書物のうち、近世後期の日本を代表する知識人の一人、大田南畝の遺稿と称して出版された（が、前稿にも記したように南畝の編著である可能性は低い）『琉球年代記 付雑話』の、「雑話」部分にみえるものである。

周防国の人、古郡八郎らの一行が大隅国に向かう途中に難破して「ヨナクニ」へ漂着する。琉球国本島に連れられ国王に拝謁。日本の名を告げると、（琉球に至ってその子が琉球王舜天となったという伝説のある）源為朝の昔話から、みな「うやまひおそれしもおかし」。帰国に向けて船出するに際して、富饒の大国日本の人に不足はなかろうがけれども近づきの記念に、といって秘伝の媚薬を与えられる。しかし再度難破し、大陸に近づくと同乗の琉球人が恐れる。「我国にても貴国の武威を伝習」してきたので抵抗はしてきたものの元代以来中国に服従し、先方に日本との

関係を隠してきたので発覚してはならないと。そこで、月代を剃り日本人に仕立ててごまかす策をとることにすると、琉球人がその妙案に「こおどりしてよろこ」び、無事に上陸して助かり、帰国する。

ここに表れる「秘伝の媚薬」という記述に、琉球を女性優位の島と見るオリエンタリズム的偏見の反映がみえることに触れつつ、服従の象徴として異国人に月代を剃らせる近松門左衛門作の人形浄瑠璃『国性爺合戦』（正徳五年〈一七一五〉初演）「千里が竹の場」を模した趣向をとり入れていること、しかもそれを琉球人たちが屈辱とするどころか、むしろ歓喜するかのように描くことに、琉球人の日本憧憬という幻想が底流することを述べた。

同稿ではこの出典を未詳としたが、その後、この話の出所を指摘した文献に気づいた。渡辺美季『近世琉球と中日関係』（吉川弘文館、二〇一二年）第四章「清に対する琉日関係の隠蔽と漂着問題」において、清朝を脅威とみなす幕府が琉球に対する清の支配の優先を了解して琉日関係を清に対して隠させていたこと、それが清日の狭間にあった琉球の自律的な国家運営にとっても整合的であったことが論じられている。その問題の検討の糸口として、多数の琉球人の中国漂着事件をとりあげるなかで、本話の元となる漂流記が指摘され、併せて『琉球年代記』所収話も俎上に載せられている。そこで本稿では、同書で指摘された原話と比較して本話がどのように脚色されたのかを確認し、その意味するところを考えてみたい。

その原話とは、石井研堂編『続帝国文庫 漂流奇談全集』（博文館、一九〇〇年）所収の「文化十三丙子薩州漂客見聞録」で、その一部を校訂し直して刊行した叢書江戸文庫『漂流奇談集成』（加藤貴編、国書刊行会、一九九〇年）、山下恒夫編『石井研堂これくしょん3 江戸漂流記総集』（日本評論社、一九九二年）にも収められて知られるものであった。その内容は、薩摩藩の家臣古渡七郎右衛門ら一行が琉球へ赴任し、その帰りの船が難破して、琉球の離島とおぼしき島に近づくも着船ならず、しだいに「唐国漁船」を見かけるようになるうちに中国に漂着するというものである。たしかにその上陸前後には次のような、同乗の琉球人に日本人の身なりをさせる場面がある。

五里計に地方を見出、右は唐国に候得共、琉球人薩州え通路之儀は、唐国
え対忌候由、兼て及承候に付、琉球人交り居候ては、如何と存、幼年之
者之外は、月代を為剃、日本人之姿に仕替、実孝を孝助、伊久貞を矢太
郎と名付置、右地方を志し色々相働近寄候処、船数百艘程繋り有之、其
節風浪強、殊夕方に相成候間、其所に碇を入船繋仕居候処……

「地方」というのは陸地のこと。琉球人が薩摩と通じていることは中国に隠し
ていることを知っていたので、日本の船に琉球人が混じっているのはまずい
と、幼年者以外は月代を剃って日本人の姿にし、日本名を付けて着船したと
いう。とはいえ、この見聞録にこれ以外の脚色はない。そもそも中心人物の
名も「古郡八郎」ではなく「古渡七郎右衛門」、周防の人ではなく薩摩藩武士、
すなわち琉球と公的な関係にある人物であって、『琉球年代記』所収話のよう
に与那国に漂着したことも、国王に拝謁してあえて源為朝説話を持ち出して
日本人を敬う言葉を聞くこともなければ、「秘伝の媚薬」なるものを与えられ
ることもない。さらにいえば、上陸のために琉球人たちを日本人の姿にさせ
て名前を偽らせたことを淡々と記すのみで、それに対する彼らの反応は一切
記していない。

『琉球年代記』の編纂にあたって直接これが参照されたか否かはわからない
し、この話が転写されるうちに脚色され、そうした写本の一つから取られた
可能性もあろう。現在、国文学研究資料館の日本古典籍総合目録データベー
スによれば文化十三年の「薩州漂客見聞録」として国立国会図書館、国立公
文書館内閣文庫、静嘉堂文庫、早稲田大学図書館の諸写本が登録され、前年
十二年とする同一書名の項目に無窮会神習文庫本が挙げられる。本話の校訂に
用いられた国会図書館本・早稲田大学図書館本、および内閣文庫本を確認し
たところ表記の相違程度はあるものの内容的な大きな違いはなく（他は未見）、
『琉球年代記』編者自身の脚色であることも十分に考えられる。

『琉球年代記』編者の作為であるにせよ、あるいはそれ以前にこの話が写し
継がれ、あるいは聞き伝えられる過程で潤色されたものだとしても、それに携
わった人びとのなかに、日本を武威ある大国として敬い、日本に憧れる琉球
人という物語を作りあげていく土台があったことはたしかであろう。薩摩藩

士古渡七郎右衛門の漂流から唐土の見聞までを含む一定の長さを持つ記述に對して、そのなかのごく一部に過ぎない、この琉球人に日本装をさせた場面のみを取り出して増幅させた人びとの関心は、あきらかに琉球人の日本賛仰にある。『琉球年代記』に本話を掲載したあと、それに付けて曰く、この漂流記は中国のことについても詳細に記しているが、それは省略して何よりも「琉球人の月代「琉球人の月代を剃て明人をくらませしおかしさ」を摘録した、と。この付記にまさにそうした関心が露骨に表れているといえよう。

渡辺前掲書はこれについて、以下のように指摘している。

琉球人の『日本人化』という行為を「おかしさ」として受け止め得る社会状況が存在していたことは確かであろう。そこからは「清—琉—日」の関係に対する当時の日本社会の認識の柔軟性・曖昧性も垣間見える…（中略）…当時の日本人は、清日に臣属する琉球が清に対してのみ琉日関係を隠蔽することの遠因—すなわち二国の支配秩序の琉球における序列構造—にはほとんど思い至らなかったようである。

このように清の支配が優先すること、つまり日本がそれに対抗し得ないことに疑問を抱くどころか当然のこととして素朴に受け止めたという面もあろう。ただ、ここでは中国を恐れて形式的に服従するも、日本の側に心を寄せる琉球人という物語として受容し、そのように慕われることに満足感を覚えるという心性として、情緒的な次元で解釈しえる面の方が大きいのではないか。

難破船が中国大陆漂着時に琉日関係の発覚を避けるべく同乗の琉球人に日本装をさせたというごく短い記述が、『琉球年代記』所収話のような、王をはじめとして琉球人たち一党が日本を敬慕する物語に増幅された。今後、その過程が追えるような資料が見いだされることを期したいが、その端緒とその変容の帰結の一つが確認されたことで、この言説を享受し、転写した人びとの願望のありようがはっきりと見えてきたといえるのではなからうか。

<ABSTRACT>

**A Supplementary Note to ‘*Sasae ni sareta Ryûkyû*
(Ryûkyû, being made a prop for Japan)’**

KOBAYASHI Fumiko

My essay in the title was published as a part of a book, *Nihonjin wa Donoyouni Nihon wo Mitekitaka* (*How Japanese had been viewing Japan?*, Yuko Tanaka (ed.), Tokyo: Kasamashoin, 2015), which was a part of the outcomes of our five years project based on this institute. A story that Ryukyuan was made disguised as Japanese was cited from a book titled *Ryûkyû Neidaiki* (*A Chronicle of Ryûkyû*), published in 1832 in the essay above without being found its origin. It turned out to be from a record of castaways from Satsuma (now Kagoshima pref.) to China in 1816, but the story seems to be extremely exaggerated in order to emphasize how Ryukyuan adored Japanese in the imagination of Japanese of the day.